

西部センターだより 3号

H27.10.30

歴史館の正面



明石海人のこと

文学者 明石海人を知ったのは、お恥ずかしながら最近のことです。それは、岡山県瀬戸内市にある国立療養所長島愛生園を訪れた時です。長島愛生園歴史館で、学芸員の方が彼のことを話されました。彼は31歳の時にハンセン病患者としてここに強制収容されます。病と闘いながらも、生涯を文筆活動に捧げた人物でもあります。治療薬プロミンは、まだ開発されていません。病は日毎に彼の身体を蝕み続け、34歳のとき光を失います。けれども、彼は周囲の協力を得ながら、死の間際に歌集「白描」を完成させます。

彼に興味を抱いた理由は二つあります。一つは、彼が何故絶望的な状況にもかかわらず文筆活動に打ち込んだのか知りたかったからです。もう一つは、彼が私と同じ教員をしていたことを聞き、妙な親近感を抱いたからです。

さて、私は早速書店に出掛けて明石海人歌集(岩波文庫)を買い求めました。「白描」序文の中には、学芸員が口にされた次の言葉が載っていました。

深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければ何処にも光はない

当時不治の病とされたハンセン病に冒されている己の境遇に絶望することなく、力強く生き抜くという彼の並々ならぬ決意が読み取れます。また、長島の地から想起される深海魚に自分を喩え、かつ眨めているようにも感じます。

「らい予防法」という人権無視の隔離政策を推進した法律こそが、いわれのない差別や偏見を生みました。「長島愛生園に今も生活されている方は、全員治癒されておられます。患者さんは一人もおられません。ここに入所されているのは、ハンセン病の後遺症をもつ障がい者なんです」と言われた学芸員の言葉は今でも忘れられません。すでに帰る故郷もなく、ここを終の棲家にしなければならなくなった人たちに対する国の責任の重大さを改めて考えました。

彼が「白描」を世に出したのは、ハンセン病について多くの人に知ってもらいたかったからです。全てのハンセン病患者の代弁者でもあります。別れ際、学芸員の方はこうも言われました。「このような差別をなくすためには、問題に関心を持ち、正しく理解することが必要です。どうか皆さん啓発してください」私たち公務員の役割がここにあるように感じました。人権尊重の推進役として、できることから始めたいという思いでこの文を今回載せました。

最後に、歌集の中の一詩『診断の日』の冒頭部分をご紹介します。

医師の眼の穩(おだ)しきを趁(お)ふ窓の空消え光りつつ花の散り交ふ

そむけたる医師の眼をにくみつうべなひ難きころ昂ぶる

言もなく昇承水に手を洗ふ医師のけはひに眼をあげがたし

看護婦のなぐさめ言も聞きあへぬ忿(いかり)にも似るこの侘しさを

診断をうべなひがたくまかりつつ扉に白き把子(ノブ)をば忌む



所長 狩野 正夫



これまでの研修のご紹介

* 詳細は、ホームページ(社会教育の情報提供)をご覧ください

「親学プログラム2」対応親学ファシリテーター養成講座 浜田:7/10(金)益田:7/27(月)川本:8/21(金)

【講義Ⅰ】 いじめの正しい理解

(浜田・川本) 浜田教育事務所指導主事 大達高弘 氏 / (益田) 益田教育事務所指導主事 三口清伸 氏

講師からは、いじめの状況や定義、態様、ネットいじめ、構造、性質、要因の説明がありました。その中には・ネットいじめは極めて深刻! ・いじめの被害・加害経験のない児童生徒は1割! いつでも、どこでも、誰にでも起こりうる ・いじめは、見ようとしなければ見えないという話がありました。

子どもをいじめ加害に向かわせないためには、どう関わることが大事になってくると話され、保護者として、大人としてあたたかな関わりの中で豊かな心を育んだり、自他を尊重する態度を育てたりすることを通して、自尊感情や人権感覚を培っていくことが必要であり、また、大人自身が襟を正し、子どもの手本となるよう人権意識を高めていく努力をしていくことの必要性を強く話されました。



大達氏



三口氏

【講義Ⅱ】 児童虐待の正しい理解

(浜田・川本) 浜田児童相談所 判定保護課課長 岩谷宏一 氏 / (益田) 益田児童相談所 判定保護課課長 岩本正義 氏

講師からは、児童虐待の定義、相談状況、虐待の背景、虐待を疑わせるサイン等の話がありました。また、子どもが虐待のことを話し始めたら、話のできる関係を築き、問題点・(客観的)事実・安全を確認し通告するという手順を踏まえ、その上で、子どもを虐待から守るための5カ条として

1. 「おかしい」と感じたら迷わず連絡
2. 「しつけのつもり・・・」は言い訳
3. 一人で抱え込まない
4. 親の立場より子どもの立場を優先
5. 虐待はあなたの周りでも起こりうる

を紹介されました。一方、虐待者は人権侵害の当事者ではあるが、その背景には深刻かつ複雑な養護問題をはらんでいることもあり、援助を要する人でもあると話されました。



岩谷氏



岩本氏

【説明Ⅰ】 概要

【説明Ⅱ】 開発の趣旨と方向性

「親学プログラム2」は、いじめ・児童虐待の防止・早期発見・支援のために開発しました。これまでの現行プログラムの良さを生かしながら、その上に、「様々なつながりをつくる」「親の社会的役割について考える」「いじめや児童虐待予防について考える」の3つを柱にすえました。これにより、「家庭内における親の成長・自己実現の支援」に加え「地域社会における親の成長・自己実現の支援」に結びつくものと考えています。

【説明・演習】 それぞれの内容説明とプログラム体験

内容

1. 「様々なつながりをつくるプログラム」
親同士・親と地域・親と学校等が相互につながることの大切さに気づく
2. 「親の社会的役割を考えるプログラム」
親が他の子や親とのかかわりを考える中で「親の社会的役割」に気づく
3. 「いじめ予防にかかわるプログラム」
4. 「児童虐待予防にかかわるプログラム」
いじめや児童虐待を直接的なテーマとして、それぞれの予防策・対応策に気づく



プログラム体験

2-②「オトナの役割を考える」 ランキング

「わが子」から「わが子もよその子も含めた地域の子」の視点で考える



傍観

無関心

3-①「われわれ大人にできること」 シミュレーション・ラベルワーク いじめの疑似体験



4-③「こんな時、わたしなら・・・」 エピソードを聴いて

似たような体験は誰にでもある特別なことではないという気づき



【説明Ⅲ】 実施にあたって

「親学プログラム」と「親学プログラム2」は、それぞれの視点から親の役割・機能を支援するとともに、相互の気づきをより深めることで、親自身の人間的な成長を支援するものになっています。シリーズで実施されることでよりねらいに迫っていきたく考えています。また、配慮の必要なプログラムもあることから、企画・実施にあたっては、ねらいを明確にし、参加対象者の実態等の把握に努めた上で実施することをお願いします。必要に応じては、西部社会教育研修センターにご相談ください。ファシリテーターのみなさんが安心して実施できるようにサポートいたします。

子どもにかかわる全ての人と一緒に、より良い子どもの育ちのために、親個人の幸せのためにこのプログラムが活用されることを願っています。

【意見交換】 「親学プログラム2」のファシリテートにあたって

〇個人で付箋に書き出し(いいね、こうしたらどう? 不安な点等) → 付箋グルーピング → 意見交換

いいね!

- ・子育てする親の味方が増える!
- ・親として、大人として広い視野で考えられる
- ・いじめ問題が身近に感じられるようになった

こうしたらどう? 不安な点等

- ・子どもに体験してほしい
- ・重たいテーマでもフツと笑える要素をいれたい
- ・現行プロの浸透がなければ、「2」の実施は難しいのでは?



市町村社会教育担当者研修

全県一区 大田市民会館：9/14(月)

【説明Ⅰ】 本県における家庭教育支援施策の現状

県社会教育課 家庭教育SL 榎野 吉人氏

榎野SLからは、家庭の教育力の低下と言われているが、家庭は努力している傾向にあり、家庭教育が困難な社会になっているのではないだろうかとお話がありました。本県ではその支援として、○結集！しまねの子育て協働プロジェクト ○親学プログラムの普及・定着支援 ○親学プログラム2の開発、ファシリテーター養成 ○職場で親学OPTCA活動活性化事業を行っており、親の育ちを応援し、家庭のネットワーク、支援のネットワークを広げていきたいとも話されました。



【説明Ⅱ】 「親学プログラム2」の意義とその活用について

社会教育研修センター 社会教育主事

現行「親学プログラム」は、親同士が日頃の子育てをふり返り、知識・経験・不安・悩みなど出し合い、親としての役割や子どもとのかかわり方の気づきを促すことを目的に開発されました。「親学プログラム2」は、対象を全ての子育て層に広げ、いじめや児童虐待予防につながる「親の力」の向上、地域ぐるみで親と子どもの育ちを支える「地域の力」の向上を目的とし、その上で、「様々なつながりをつくる」「親の社会的役割について考える」「いじめや児童虐待予防について考える」の3つの柱をすえました。

【講義】 『これからの時代の家庭教育支援の在り方』

講師：大阪府立大学 教授 山野 則子 氏



山野先生は、現在の子どもたちの置かれた環境や家族の現状などをあげた上で、貧困や格差が特別なことではないこと、福祉だけの問題ではないことを話されました。また、支援者同士、お互いの役割を知らず協力しあっていない、支援される側のニーズを十分把握していない、専門機関が対応できるのはごく一部であることから、関係機関の連携・協働の必要性を強調されました。そのためには、全ての子どもがきている学校に支援システムを設置することが望ましく、それを具体的に示した「学校のプラットフォーム化」について説明されました。ここで、コーディネーターの役割を期待されるのがSSW(スクールソーシャルワーカー)であり、連携を機能させるためにもその活用が重要であると述べられました。

【演習】 家庭教育事業を整理し、今後の方向性を考える

社会教育研修センター 社会教育主事

まず、「社会教育策定の意義と手順」の説明を受けた後、各グループで「わがまちの現状」を交えながら自己紹介をしました。その後、市町ごとに分かれ、「家庭教育支援に関する事業の洗い出し」をしました。次の他市町の事業を見て回る時間には、みなさん熱心に話を聴いたりメモを取ったりしていました。再びグループにもどり、他の市町の事業も参考にしながら、今考えられる「わがまちの家庭教育支援」について、本日の受講者でもある他部局との連携を図りながら計画的に進めるための方策を探りました。



【講評】 「演習」の様子から

講師：大阪府立大学 教授 山野 則子 氏

つながっていく仕組みづくり：やりっぱなしにしないで、結果を確認(共有)できる会議をもつ・チームでできないことを共有しておく

第2回コーディネーター研修

いわみーる：10/10(土)

【事例発表】 『地域のみんでつくる学びの場』

認定NPO法人 放課後遊ぼう会

理事長 足立 典子 氏

足立さんは、子育て中に、外で遊ぶ子どもを見かけなくなったり遊ぶ場所がない現状をみて、保護者3人と「放課後遊ぼう会」を結成しました。2年後に「プレーパーク」事業を受託したことから活動はさらに広がっていったそうです。「プレーパーク」はプレイリーダーのもと、自分の責任で自由に遊ぶことをモットーとしており、ケガや事故は自分の責任になります。このことで、子どもたちは小さなケガを体験しながら危険を回避する能力を身につけていくそうです。



また、遊び場には、リスクとハザードの2種類の危険があることを述べ、リスクは成長には不可欠なものとしてできる限り許容していること、ハザードは子どもが予知できず突発的な事故につながるからできるだけ取り除くようにしていると説明されました。また、地域の人をボランティアとして巻き込むために何度も説明をした経緯を話され、その結果、今では「遊び場」が住民の居場所、自己実現、世代間交流の場となっていると話されました。その他、便りで活動の様子を周知したり、PTAが年に1回活動に参加するような工夫をしておられました。遊びがもつ意義(自己肯定感・根気・思いやりの心が育つなど)をスタッフ一同が理解し、やりたいことを自分の意思でやる、自分で選択できる子どもたちをみんなで育てておられました。

【事例分析】 『コーディネーターとしての工夫を考える』

講師の取組みを聞いて感想を出し合い、全体で整理する

保護者を巻き込む仕組み

- ・あきらめず
- ・PTAをスタッフに
- ・保護者のニーズを探る

役割の明確化

- ・プレイリーダーとボランティアの役割分担
- ・ボランティアに大きな責任を持たせない
- ・ボランティアの学びを考える

ねらいの明確化

- ・遊びの意義を明確に
- ・規制をしないで遊ぶ
- ・子どもの創意工夫

広報

- ・ボランティア募集の回覧
- ・便りの発行

話し合い

- ・プレイリーダーと決める
- ・学校との協議
- ・子どもの話を聴く

その他

- ・市の保険を適用
- ・他市町の取組みを研修等で知る



【演習】 『地域提案型学習プログラム企画・立案』



* 地域提案型学習プログラム・・・「子どもの学び」と「大人の学び」の両方のねらいを明確にした学習プログラム

公民館等職員研修

第3回 「まちづくり・人づくり」を意識した公民館事業計画の立案

6/22(月)いわみーる

【講義】評価を意識したPDCAサイクルについて

■PDCAサイクルとは何か、なぜPDCAサイクルが必要なのかについて理解する

- ①成り行き任せの事業展開を回避することができる ②成果を予測するので、優先順位がつけやすく無駄が省ける
- ③説得力のある予算建ができて、新たな財源の確保が期待できる ④評価→改善により、次年度の事業がより効果的・効率的に

■評価の視点と評価の指標の必要性を理解する

- 1. 現状把握は多面的に 2. ねらいは、具体的で評価と整合性のとれたもの
- 3. 評価は段階的に縦、視点と指標で構成する 4. 視点と指標は、具体的にわかりやすく

【演習】評価の視点と指標の洗い出し

■自分が企画立案しようとする事業についての視点

- I 成果・効果がたかまるための工夫・手法 II 事業の実施結果や成果 III 参加者の気づきや変化・変容 IV 波及効果

【演習】事業計画のリデザインー評価とねらいの整合性ー / 展開プログラムの作成 / 発表とリデザイン



寄り添う担当者

第4回 「公民館事業の評価と効果的なプレゼンテーション」

9/29(火)いわみーる

【意見交換】事業の成果と効果を発表し合う

- よかった
 - ・子どもたちが楽しんでくれた、いきいきしていた
 - ・笑顔
 - ・いろいろな人の意見が聞けた
 - ・中学生の普段見られない姿が見れた
 - ・会の名称を変えたら参加者が増えた

こうしたい

- ・無理のない計画を立てたい
- ・より多くの人の参加を工夫
- ・準備段階で参加者の意見を聞けるように



【演習】公民館事業の検証と評価

■評価結果から事業の効果と改善点を洗い出す

■実施した事業について、以下の視点からふり返り、ワークシートに書き出して整理する

- ①評価の視点から ②事業実施中のエピソード ③公民館職員としての5つの力 ④地域課題解決の視点から ⑤改善点

【ミニレクチャー】説明力を高めるプレゼンテーションのコツ

コツ・・・表情・表現・姿勢/発表の構成から説明

Point・・・☆対象は誰！わかりやすく・簡潔に・印象深く ☆ビジュアル・ツールは効果的

【演習】簡単なミニプレゼン(2分間)

【ミニレクチャー】第5回のプレゼンテーションー実践した公民館事業のプレゼンテーション

プレゼンのツール(パワーポイント・フリップ・紙芝居・現物/成果物・ナマの声・動画・ホワイトボードetc)

第5回プレゼンのpoint(上手くやるよりきちんと伝える・ゆっくり、はっきり・間を大切に・時間配分・詳細[D]は的を絞ってetc)

【演習】プレゼン資料の作成・準備



第5回 「実践発表とふりかえり」

10/23(金)島根県立少年自然の家

秋晴れのもと、少年自然の家で東西合わせて21名のみなさんによる実践発表会が開催されました。5会場に分かれ、それぞれ熱のこもったプレゼンテーションが繰り広げられました。



(参加された方から) 経験・失敗を積み重ねて何事も進むべきなんですネ。みなさんの地域への愛情を改めて知ることができました・・・

(受講生から) 今までの事業の見直しができ良かった

宿題もたくさんあったし、研修会も色々とする事があり大変でした^_^; でもそれ以上に沢山の収穫があり良かった!

予告

つなぐ・つながる実践発表交流会

サン・レイクへGO!

きっとみつかる明日への一歩 きっと出会えるすてきな想い

日時

平成27年
12月8日(火)
9日(水)

会場

青少年の家サンレイク
(出雲市小境町1991-1)

12/8☆実践発表[学校支援・放課後支援・家庭教育支援]

12/9☆全体会 テーマ「よりよい子どもの育ちのための『親育ち』」

○パネルディスカッション

パネリスト: 岡田正彦氏・久井英輔氏・幸増千世氏・日野伸哉氏

コーディネーター: 山本芳正氏

○講演/ 講師: 志々田まなみ氏(広島経済大学教授)

外は雪?でも中はぽっかぽか♪

西部センターだより 3号

2015年10月30日発行

発行所 島根県立西部社会教育研修センター 〒697-0016 浜田市野原町1826-1 (いわみーる 3階)

TEL: (0855) 24-9344 FAX: (0855) 24-9345 Eメール: seibu_shakaikyoku@pref.shimane.lg.jp